

1960-70年代の絵本をめぐる発達心理学的意味づけの過程

—佐々木宏子の研究に着目して—

教職開発コース 若 林 陽 子

How Developmental Psychology Debated Picture Books in the 1960s and 1970s:

Focusing on Hiroko Sasaki's Research

Yoko WAKABAYASHI

This study examined the work of developmental psychologist Hiroko Sasaki (1940-) in the 1960s and 1970s, which correspond to the early years of her research career. Sasaki views picture books as important on the basis of the Soviet psychology that she has studied since her student days and her creative interpretations of this perspective. Specifically, she evaluates picture books as helping infants inherit the history of the human spirit and culture and as instruments that encourage the development of verbal thinking and non-verbal sensitivity—skills that are specific to humans. Previous studies pointed out that the 1960s and 1970s in Japan were periods when Soviet psychological research on thinking processes was actively translated and, at the same time, when picture books began to take root in the home and in preschool. Focusing on Sasaki, this study delineated how picture books illuminate the significance of developmental psychology research in infants' cognitive processes and sensitivity in real-world home and preschool settings rather than in experimental contexts.

目 次

- 1 はじめに
- 2 ソビエトの心理学研究の受容とその創造的な解釈
 - A ソビエトの心理学への着目と概念形成の実験
 - B 絵本を用いた論理的思考と想像の実験
- 3 「人間的なるもの」の発達を支える絵本の心理学
 - A 文化・歴史・意味の媒体
 - B 大人による読み聞かせの心理学的意義
 - C 感性的認識・美的能力の発達研究の糸口
- 4 おわりに

1 はじめに

本稿は、心理学者の佐々木宏子（1940-）が、活動の初期に当たる1960-70年代に展開した研究を検討する。佐々木は、ソビエトの心理学の受容とその創造的な解釈を通じ、歴史社会的な存在としての人間に特有な発達をもたらすものとして絵本を意味づけてきた。この過程は、日本の絵本をめぐる心理学が、幼児の認知や感情についての理論的理解を本格的に深め始めた局面として描くことができる。

絵本と呼ばれたメディアに関する科学的研究は、戦前から日本ですでに存在した。こういった研究は、多

くが昭和初期に当時の心理学研究として始まったこと、研究を駆動したのが1938年の内務省の通達「児童読物改善二関スル指示要綱」であることが指摘されている¹⁾。これは、俗悪とされた漫画的な本を駆逐する出版統制としての姿をもつ。しかし、統制の動きは同時に、絵本の現状を把握しその価値を探究したり、それに伴って実験的な絵本出版を進めたりする契機となったことも明らかになっている。保育の歴史研究者の浅野俊和によれば、1936年に発足し多数の心理学者や保姆が参加した保育問題研究会は、実証的な研究方法で子どもの発達段階に即した絵本のあり方を問い、研究の体系化を試みたという。絵本の芸術的・観念的な評価軸は批判され、子どもの年齢に応じた内容や形式が追究された。その成果は、日本で初めての絵本に関する研究書とも言われる牛島義友・矢部信一『絵本の研究』（協同公社出版部、1943年）にまとめられた²⁾。また、漫画史として戦中の絵本を検討した宮本大人は、発達段階説に基づく子どもへの認識が、年齢に合った絵や言葉の編集を推進し、そういった適書を子どもと結びあわせるための文化環境調査や親への指導も展開したと指摘している³⁾。つまり、「優れた」絵本が希求されるなかで、子どもの発達段階が具体的に絵本を介して明らかにされ、絵本の価値は、絵や言葉

の内容が子どもの発達段階と合致しているということとして見出されてきた。

戦後の科学研究には、前述のような個別の絵本の評価に直接言及する「読書科学」を実践した心理学者の阪本一郎による研究もあるが⁴⁾、他方で評価よりも絵本を介した子どもの行動や認知とその発達に焦点化する心理学研究がある。こういった研究は現在盛んに展開していると言えるような研究でもあるため、その存在はたとえ歴史的観点からも疑いにくいにもかかわらず、戦後における展開がこれまで整理されているとは言えない。これには以下のような先行研究による指摘の状況が関係していると考えられる。戦中への焦点を中心とした先行研究では前述の通り、絵本を介した子どもの行動や認知とその発達の心理学的解明は、子どもの実際を明らかにすることを純粋に目的としたものというよりも、発達段階との合致を調査し研究を通じて絵本の価値を向上させたい動きと不可分なものと意味づけられている。こういった意味づけが戦後史記述にも影響を与えているのか、絵本に関する代表的な心理学者と挙げられる人物は、市販の絵本の作品としての価値あるいは理想的な指導を示した人物として紹介されている⁵⁾。例えば先行研究にもしばしば言及のある戦後の臨床心理学者の村瀬孝雄は、心理学者の協力による絵本の評定の前に、子どもがどのような絵本に興味を示すかの「子どもの心理の解明」を実験しているにもかかわらずである⁶⁾。

つまり、先行研究では、戦中戦後において、絵本を介した子どもの行動や認知を明らかにすることと、個別の絵本を評価し優劣を決めることが、手段と目的の関係として暗黙に結びついてきたと考えられている。しかし、このような結びつきは戦後も一様であり続けたと言えるだろうか。本稿は、上記の2つの課題が異なる関係を結び始めた時期として、戦後の「絵本ブーム」期にもかかわらず絵本に関する心理学史の解明が未だ不十分とも言われている⁷⁾、1970年代を探究する。本稿は、戦後における、絵本を介した子どもの行動や認知とその発達を明らかにすることの系譜を取り出す試論である。

上記の目的のために本稿は、1970年代に絵本についての研究を本格化させた心理学者の佐々木宏子を検討する。佐々木については、絵本を親子で共有することの機能を1970年代に早くも主張した研究者⁸⁾、1998年に絵本についての研究で初めて博士号を取得した研究者⁹⁾として先行研究で言及されている。これらや、第5代絵本学会会長という経歴も合わせると、日本に

おける絵本の心理学での重要性がうかがえる人物と言える。佐々木は、初の単著『絵本と想像性』（高文堂出版社、1975年）のなかで特定の絵本の優劣を述べることもある一方で¹⁰⁾、それだけでなく、絵本をめぐる発達心理学的な意味を、本や雑誌記事で幅広い人向けに論じた。

また、本稿が焦点化する佐々木の研究は1970年代いっぱいまでのものとする。これは、佐々木が1980年代からは自らが創設した私設図書館・宇都宮絵本図書館での実践研究を複数の本にまとめるほどに展開しており、それより前を、理論の確立した一連の時期と予想できるためである¹¹⁾。

本稿の構成は以下の通りである。最初に、佐々木宏子（櫛田宏子¹²⁾）が大学院在学中とその直後に発表した、1960年代中頃から後半の理論研究と実験研究に焦点化する。次章では、出産後に単著『絵本と想像性』を上梓したのを皮切りに¹³⁾、絵本をめぐる佐々木が独自に発達心理学の理論を再構成する1970年代のさまを描く。

2 ソビエトの心理学研究の受容とその創造的な解釈

本章は、佐々木の研究者としての最初期に当たる1960年代の研究を検討する。まず、研究の理論的背景に着目すれば、全ての研究においてソビエトの心理学への依拠がある。そのうえで、佐々木が独自に重要と考える要素を増強した創造的な解釈も提示されている。研究の方法について言えば、佐々木は主に実験研究を行い、修士課程修了後からは実験に絵本を活用している。これは、市販の絵本それ自体に対する関心というよりも、学生時代から続けていた幼児の思考の発達に対する関心からであった。

A ソビエトの心理学への着目と概念形成の実験

佐々木が1960年代に行い学会大会や学会誌で発表しているのは独自の実験の成果だが、いずれの論文でも、思考や発達についての理論的な吟味を多分に含めている。しかも、この吟味には、例外的にあえて実験研究ではなく「J・ピアジェの思考心理学について：弁証法的唯物論の立場からの問題提起として」¹⁴⁾という理論的な論文までも発表されるほどに、力点が置かれていたと考えられる。その内実は、歴史社会的なものとして発達をとらえる、ソビエトの心理学に対する積極的な可能性の記述である。

前掲の論文でソビエトの心理学と対立的にとりあげ

られているのが、題目にも含まれる心理学者ピアジェの理論である。佐々木は、ピアジェが数学や生物学の公理を参照し、完成された精神状態の枠組みとして思考をとらえている点を批判する。それに対し、対象の存在があって生まれる人間と環境の相互作用の過程こそ思考であると述べ、この立場を「弁証法的」ないし「唯物論的」と形容している。この論文では基本的に、ピアジェ批判とそこに示唆を与えるソビエトの心理学という二項対立で議論が進んでいる。

また、この論文全体に渡る佐々木の引用元には、ヴィゴツキー、ルビンシュテイン、メンチンスカヤ、オブホワなどのソビエトの研究者のうち、当時すでにその著作の日本語訳が出版されていたものもそうでないものも、多数含まれる。こういった点に、佐々木が丁寧に当時のソビエトの心理学を学んでいたことがうかがえる。

このようなさまを踏まえれば、同時期に発表された最も古い実験研究「思考研究の方法論についての一考察：とくに幼児の概念形成の実験を中心として」¹⁵⁾が、ソビエトの心理学に依拠していることは自然であると言えるだろう。同論文の「問題と目的」によれば、「Piaget, J.らの研究」は、「論理的思考の究極的法則」を「数論理体系」と考えている点に問題があり、「教授・学習」条件を軽視しているという¹⁶⁾。これと比較すると有意義な研究として佐々木は、「概念形成を過程として把握するため、発生的総合法をと」っているという、ヴィゴツキーなどソビエトの心理学者による先行研究を挙げている。

ただし、佐々木は、前述の通りたしかにソビエトの心理学に依拠しつつも、このソビエトの先行研究の知見よりもさらに、幼児の概念形成における言語の役割を高く評価する独自の立場から、実験を計画実施していると言える。その理由は以下である。

佐々木は、前掲のソビエトの先行研究について、「しかし、これらも言語によるコミュニケーション、つまり概念形成における言語的分析の本質的条件をおとしている」¹⁷⁾と指摘する。この問題意識から佐々木は、実験において、実験者が多様な形状のブロックについて設定した分類法の意味を幼児達に見つけ出させる際に、与えた4つの条件のうちに、実験者の手で直接ブロックの分類を支援せずに「そうですね」などの言語による「区別の強化」のみを与えるという条件を含めている¹⁸⁾。論文の結論によれば、幼児が分類をする過程で、分類の定義となる概念について、他者と自己に対し「言語による定式化」を行うという「意味内容（思

想）の一般化」が、概念形成に重要な影響を与えるという¹⁹⁾。ここまでの流れから、「概念形成を過程として把握する」ソビエトの心理学の研究知見を、佐々木が換骨奪胎させている面が見えるだろう。

つまり、この時期の研究には、理論研究と実験研究ともに、ソビエトの心理学という下敷きがある。そのなかでさらに、幼児が言語を使うことの概念形成にもたらす重要性が大きく焦点化されている。佐々木が最初に行った実験は幼児がブロックを分類するもので、これは幼児の思考における言語の役割への高い関心がうかがえるものであった。

B 絵本を用いた論理的思考と想像の実験

本節では、佐々木が修士課程修了後に思考の発達への関心から行った、幼児の論理的思考に関する実験と、「おはなしづくり」を通じた想像に関する実験に焦点を当てる。佐々木は、市販の絵本を、実質的には実験用の絵カードとしてではあるものの、初めて研究で用いている。つまり、絵本の使用という点において、前節で示した研究とは大きく異なる。ただし、佐々木は引き続きソビエトの心理学を引用しており、これを実験の理論的基盤とすることを論文で明記している。そのうえ、ソビエトの心理学に依拠しつつ佐々木が独自に重要と考える要素を足した主張を展開するという、前節で検討した佐々木の議論の方法がここにも見られる。この様子を以下詳述する。

論理的思考の研究と想像の研究は、一見すると異なる課題のようにうかがえるが、実際には連続的な研究であり、しかも前節で検討した概念形成の研究とも地続きであるとさえ考えられるものである。なぜならば、以下のように、佐々木は「概念化」と「想像」をともに「体系」づけることとして意味づけているためである。

概念化するというのが、比較、分類の行為を通して、ある一つの対象を全体のなかに位置づけ、体系化し、そのものの矛盾をより新しい体系の中に解消していくとするならば、想像は、知覚したさまざまな印象をバラバラに分解し、そのなかの一部の特徴を強調し、修正し新たな創造物として体系だてていく方法であるとみなしていいだろう。この分解と、ある特徴の強調、修正、^{ママ}縮少、拡大、転移などの過程がいかに創造的であるかによって想像の内容が決定されてくるのである。子どもが従来「想像的」であるといわれるのは、生活経験、

知識の貧弱さからくる空想性であり、必ずしも創造的想像へとつながるものではないだろう²⁰⁾。

まず、先に行われた、日本教育心理学会『教育心理学研究』掲載の「幼児の論理的思考についての実験的一考察」²¹⁾から参照しよう。佐々木が基礎としているのはやはり、前節で示した研究と同様に、ピアジェへの批判とソビエトの心理学である。これは、同論文の序論で、ピアジェの「自己中心的思考」が「幼児独特の思考現象」に焦点化したのをソビエトの心理学者エリコニンが実験で批判したことが紹介され、佐々木がこれを積極的に評価しているさまから明らかである。また、同論文の実験では、予備実験が「幼児に論理的構造と形式の形成をいそぐあまり、幼児の日常的経験から少しはなれた概念定義を用いた」ことへの反省から、実験の教示条件に修正を加えたと説明されており、こういった態度からも、環境や経験との相互作用から人間の発達過程をとらえようとする歴史社会的発達観への依拠がうかがえる²²⁾。

ただし、佐々木は前述のエリコニンによる批判を紹介した直後に、以下のように述べている。佐々木は、「幼児が論理的思考の形式を獲得していくときの橋わたし」をとりわけ重視すべきであるという独自の要素を付加させながら、ソビエトの心理学の研究知見を発展的な方法で受けとめる。

筆者もその理論的立場〔エリコニンをはじめとする、「幼児独特の思考現象」を中心とした思考研究を批判する立場〕は肯定的に認める。しかし、幼児の思考活動に自己中心的傾向や転道推理²³⁾がよく出現することは否めない事実であり、問題はそれらの現象をどのように分析するかである。〔中略〕いわゆる幼児的な特殊な現象のみを中心に検討し、その特殊性を強調するに止っていたのでは、幼児が論理的思考の形式を獲得していくときの橋わたしがどこにあるのか分析しにくいだろう²⁴⁾。

つまり、前節で示した概念形成の研究の例と同様に、佐々木は、ソビエトの歴史社会的な発達観による心理学という基盤を崩さないまま、自分自身の問題意識に引きつけるかたちで、思考の発達過程を明らかにするための理論的背景を構築していると言える。

また、前述の通り、この研究で佐々木は初めて市販の絵本を実験に導入している。実験の内容は、60人の6歳児が、「さかな」「とり」「むし」「けもの」いずれ

かに該当する16種類の動物が1種類ずつ描かれた「カード」16枚を見て分類をするというものだが、この「カード」とは、「[「いきているもの」かがくのほん(2)]という童心社から出版された絵本を切り抜いたものと説明されている。そして、このように絵本をカードの形式に再構成していること、分類概念の教授にも用いる動物の説明文は実験の目的に合わせて一部省略していると論文で説明されていることなどを踏まえると²⁵⁾、佐々木がここで実験に用いている絵本は実際の文脈で幼児に楽しめるものとしての絵本ではないことが明らかである。もちろん、前述の通り佐々木は「幼児の日常的経験から少しはなれた概念定義を用いることについては問題視しており、具体的には予備実験から本実験の間に例えば「とり」の説明文を「くちばしをもち、たまごから生れる」から「とりは、2まいのつばさでとびます」へ変更しているが²⁶⁾、このことと、実験素材が「日常的」であることとは問題の位相が異なると言えるだろう。佐々木はあくまで、概念定義と幼児の日常的経験の関係を問うている。

続けて、この研究の3年後から継続的に発表された「おはなしづくり」の研究²⁷⁾を参照しよう。この研究でも、ソビエトの心理学が理論的基盤となっており、市販の絵本が実験に用いられている。また、この実験でも、絵本は絵カードの役割を果たしていると言える。前述の切り抜かれた絵本ではないが、絵本のページを撮影して縮小したものが用いられている。

「おはなしづくり」の研究にはどのようなソビエトの心理学的な基盤がうかがえるか、この研究の成果が最もまとまっている論文「思考の発達」²⁸⁾から確認しよう。同論文で実験の概要が具体的に説明され始める直前に佐々木は、この研究の理論的立場をヴィゴツキーの想像に関する主張に置いていると明言している。ヴィゴツキーの『子どもの想像力と創造』の記述を引用しながら佐々木は、ヴィゴツキーが「想像の心理機構」とそれに結びつく「創造活動」を理解するために人間の空想と現実の「結びつきの解明」が必要と述べていることを紹介する。続けて、子どもは大人よりも「自分の想像の所産をより多く信頼」し「制御しない」ゆえに、真実でないという意味での虚構を多く作り出す傾向はあるが、それは子どもの想像を構築する素材や素材の性質が貧弱だからである、という記述を前掲の本から抜く。その直後に佐々木は、「このようなヴィゴツキーの見解と同じ立場から」実験を行ったと述べ、7枚の並んだ絵を見て物語を作らせる「おはなしづくり」の研究の具体的な説明を進めるのである²⁹⁾。

上掲の「思考の発達」は学術色の強い文献であるため書かれていないが、別の文献では実は、こういったヴィゴツキーの、子どもの想像を本質化したり過大評価したりせず想像に発達の可能性を見出す主張に、佐々木が元来持っていた「子どもの想像力は豊かである」という言説への素朴な違和感が共鳴してこの実験に発展したと読み取れる記述もある³⁰⁾。自分自身の意見ともつながるような思想として、ソビエトの心理学が佐々木の論述のなかで機能し、独自に意味づけられているとうかがえる。

したがって、本章からは、ソビエトの心理学を起点としながら佐々木が1960年代中頃から継続的に幼児の思考の実験研究を展開したこと、そして1960年代末には市販の絵本も実験素材として活用されたこと、これは乳幼児の生活における絵本を扱ったものではなかったことが明らかになった。次章では、佐々木が絵本についての言及を急増させた1970年代において、佐々木が発達心理学の概念をどのように整理し再構成したかを検討する。

3 「人間的なるもの」の発達を支える絵本の心理学

佐々木は、1969年春に長女を出産後、家庭での乳児期の長女の観察記録を基礎に発達心理学の知見を交えたエッセイ『絵本と想像性』(1975年)を上梓する。1970年代において佐々木の著作物は、同書をはじめとする本のほか心理学や教育に関する一般雑誌という、学会や大学といった学術活動を主目的とする団体以外の媒体に、軸足が置かれるようになってくる³¹⁾。また、『絵本と創造性』の出版以降、内容も絵本に関わるものが急増する³²⁾。

佐々木は、乳幼児と絵本の関わりをめぐる、ソビエトの心理学に引き続き依拠し、時にはアレンジを加え、発達心理学の新たな課題をも析出させながら、議論を展開する。そして、心理学が未だ解明していないという「子どもの人間化をおしすすめる最も本質的条件」³³⁾、佐々木が「人間的なるもの」と呼ぶものの発達を支える素材として、絵本が意味づけられている。

なお、本章が以下三点に分けて整理する佐々木の主張は、複数の本や雑誌記事に散らばっているが、互いに重なる内容も多いため、本文では、典型的と考えられる箇所からの引用を中心とする。類似の内容が別の文献にも見られる場合には、適宜註にて文献情報を補っている。

A 文化・歴史・意味の媒体

まず、ソビエトの心理学者やソビエトの心理学における概念の名前が実際に出されながら、乳幼児の絵本を介した発達を歴史社会的なものと佐々木がとらえている理論的な記述がある。佐々木は、社会において絵本がもつ意味を、動物にはない人間独自の発達を支える点に見ている。この様子を以下詳述する³⁴⁾。

絵本をめぐる佐々木の発達への考え方を基礎づけているのは、ソビエトの心理学者・レオンチェフの主張であるという。児童文化研究者の中村悦子との共編書『集団保育と絵本』(1976年)所収の文献「子どもが絵本から得るもの」は、以下のように始まる。

子どもは、絵本などなくても「育つ」ことは事実です。おとなであっても、本などまったく読まずに暮らしている人はたくさんあります。では、なぜ私達の社会のなかに「絵本」などというものがつくられはじめたのでしょうか。このことの意味を考えるために、少し人間の発達ということについて考えてみたいと思います。

まず、子ども(人間)の精神発達をみると、そこには他の動物と著しく異なるものがあります。

レオンチェフの見解にそってまとめてみると、そのことの意味が非常にはっきりとします(レオンチェフ、松野豊訳、明治図書、1969)。(中略)

人間は、このⅠとⅡ〔人間と動物に共通する発達の条件である種の経験と個体的経験〕以外にさらに自らの発達にとって決定的な条件となる第Ⅲの「経験」をもちます。それは、

Ⅲ 社会的歴史的経験です。

子どもは自分自身の具体的な活動経験として多くのことを知ります。しかし、この知ったことの具体的な意味内容や、その社会的な評価は、すべて先行世代のおとなを介してのみ得られるものなのです。つまり、人間の子どもは、その社会の歴史——文化的条件を土壌にして、その時代が要求する「人」になっていくわけです³⁵⁾。

上掲に続けて佐々木は、「さまざまな文化的遺産」のうち、「高度の物質文化」「既成品」よりも伝達が難しい「精神的文化」「人間の精神的なもの」「人間的なるもの」は、具体的な経験を通した思考や感動や想像を通して初めて形成されると述べる³⁶⁾。この考えが、まさに絵本に対する意味づけへ明確に接続させられる記述が以下である。

先行世代の人々は、それらのもの〔「さまざまな人間の感情の広がりや深さを経験することなど」〕のありかを「文学作品」「芸術作品」「哲学、思想書」などにして次の世代に残します。

いささか概論的なことが多くなりましたが結局、絵本というもの子ども達のためにつくられたことの意味は、このことのなかにあると考えたいわけです³⁷⁾。

また、佐々木が絵本をめぐる議論で依拠するのはレオンチェフだけではない。条件反射で知られるパヴロフが、直接経験による第一信号系という神経系を基礎に成立すると主張した、人間特有の言語機能「第二信号系」の概念も引用されている。絵本の楽しさはただ早くから乳幼児に絵本を見せることによって自然と得られるものではなく、「理解」されるものであり、認識発達を基礎に成立すると佐々木は考える。「何よりもことばは、人間のつくった第二信号系」であるため、現実の物や感情の「意味がよく伝わる」ことなしには、言葉は音声にすぎないと述べられる。この、意味を含む絵や言葉は、輪郭や色などに対する視覚の発達、触覚や嗅覚にまつわる記憶や感情、実際の動植物や車などを見る経験などによって、その「意味を生き生きと再現」させられるものであるという。つまり佐々木は、人間ならではの理解が結実したものとして、乳幼児が絵本を楽しむことを意味づけている³⁸⁾。

B 大人による読み聞かせの心理学的意義

1970年代の絵本をめぐる佐々木の記述において、ソビエトの心理学者やソビエトの心理学における概念の具体名が、常に前節で述べたように引用されたとは限らない。ソビエトの心理学からの直接的な引用はうかがえずとも、絵本をめぐる佐々木の発達観は歴史社会的なものとして発達をとらえるソビエトの心理学の考えからの影響が大きいことをうかがわせる箇所がある。この様子は、読み聞かせにまつわる記述に顕著である。

ただし、その依拠の強さはトピックごとにやや異なる。ソビエトの心理学からの影響が濃いと読みとれる順に、以下三点に分けて詳述する。共通するのは、乳幼児が「人間的」になること/であることを支える行為として、絵本の読み聞かせが定位している点である。

(1) 「表象能力」の発達

佐々木は、乳幼児が絵本に関わる時の大人の支援の重要性を端的に、「子どもは読み手を介さない限り、絵本と出会うことはできません」「読み手が介在しない限り絵本としての機能をはたさないのです」「絵本は、最初おとなの読みきかせによってその内容が子どもに伝えられます」と指摘している³⁹⁾。このような主張を、専門用語を使いながら抽象化させた例が、「絵本の心理学 人間発達の新しい見方」という雑誌記事の、以下の記述にある。

絵本は、絵とコトバから成立し、かつそれが子どものものになるためには、原則としておとなによる読みきかせが必要です。〔中略〕おとなは、これら思考活動の未熟な子ども〔言語的思考にまで至りきっていない子ども〕のために、いわゆる“絵”“図式”など形象的手段を使って、子どものなかに正確な認識ができるように助けてやります。ここに子どもにとっての絵本のはたす重要な意味のひとつがでてきます⁴⁰⁾。

そして、このような大人の支援が、乳幼児が実際の事物に対するイメージを実物なしでも持てるようになる「表象能力」を乳幼児にもたらすと述べられる。この過程を佐々木は以下のように具体的に説明する。

私は、このような絵本を子ども達が楽しめるかどうかは、その子どもの表象能力（イメージ）の発達にかかっているような気がします。たとえば、1歳の子どもの生活のなかで、ネコやイヌを見たり、走る自動車を見たり、アイスクリームを食べたりします。そして、その子ども達がこれらの描かれてある絵本を見つけると、それにひきつけられ身じろぎもせず見入っていることがあります。おとなは“ブーブー自動車ね”と読みつつ、自動車が走るゼスチュアを入れたり〔中略〕読みきかせます。すると子ども達は、そこに実物が存在しなくても絵とおとなの読みきかせにより、さまざまな表象（イメージ）を頭のなかに描くことになります⁴¹⁾。

最後に佐々木は、このような表象の能力は人間特有であることを強調する。乳児が自動車の絵を見てその音や速さを思い起こしながら手足を動かせるのは、知覚が表面的なものではなく「非常に人間化された意味づ

けを内側に含んでいる」ことを示し、「絵やコトバを支えに」展開する「他の動物には不可能な発達の道すじ」があるからであるという⁴²⁾。

(2) 外言から内言に至る過程

また、佐々木は、他者に向けられた社会的言語である外言の獲得から自己に向けられた内言への深化として思考をとらえる、ヴィゴツキーの主張を想起させるような方法でも、読み聞かせの意義を説明する。これは、前項で示した、事物に対する直接的知覚から言語を介した間接的思考へという「表象能力」の発達と、矛盾しないどころかむしろ重なるものであろう。実際に、「内言」による言語的思考の未熟さを補う、「形象化されたもの」の支えの重要性を指摘している文言も複数ある⁴³⁾。ただし佐々木は実際に、前述の「表象能力」や「形象」という言葉を使わずに、「外なるもの」が「内なるもの」「わがもの」になるといった表現も用いて、乳幼児の思考の生成を論じている。外言から内言に至る過程に焦点化した、そのような佐々木の絵本をめぐる記述を以下に示す。

まず、前項の最初に字下げで引用した、「それ〔絵とコトバ〕が子どものものになる」という読み聞かせをめぐる説明がすでに、外言から内言へという過程をうかがわせるものである。また、別の文献でも内言の生成が強調されている。佐々木によれば、大人によって最初に読み聞かせられた絵本の内容は、「子どもの内なる世界にしっかりとどくまで」に、子どもが「親に読むことを要求したり、自分で読んだりしつつ執拗に繰り返す」ことで、「絵本からのイメージ」として「しっかりと子どもの心の中に定着する」という⁴⁴⁾。こういった、絵本をめぐる大人からの援助に始まりやがて子どもが独力で思考を進めるようになる一連の過程は、以下の説明で端的に表現されている。

絵本をみることも〔テレビや紙芝居と同様に〕、最初は、おとな（他者）の媒介を通してしか成立しません。だが、最終的には、絵本は子ども自身が自分で手にとって読み、そして自分ひとりでその絵本の世界を「わがもの」とすることが出来ます。〔中略〕最初はおとなによってもたらされた「外なる世界」が子ども自身の感覚、思考を通して「内なるもの」へと進むことが、形のうえから、内容のうえからもしっかりとわかります⁴⁵⁾。

なお、こういった「外なる世界」が子どもの感覚や

思考を通して「内なるもの」へと進むという過程は、読み聞かせを通じて生起するものとして、佐々木がとりわけ大きな意義を見出しているものと言える。なぜならば佐々木は、必要とあらばソビエトの先行研究を部分的に批判してまでも、絵本の読み聞かせのなかに知的な思考の過程を見出しているためである。本項の最後にこの点を詳述する。

佐々木は、「ソビエトの心理学者エリコニン」が幼児の文学の理解について「純粋に言語的な判断的思考を拠りどころとはしていない」と主張する点には同意するが、他方で「〔幼児の文学の理解は独自の〕純粋に知的な行為の性格を有しない」という主張には同意できないという。その理由は、幼児は絵本を「何度もうりかえし読んでもらっている」「文学的な意味での刺激を多く与えられた」場合、「ひとり読み」を展開するようになることが経験的にあるからと佐々木は述べる⁴⁶⁾。エリコニンの先述の主張は、絵本という形式ではない幼児期のための文学を前提としている可能性があるため、このようなすれ違いが起きたと予想される。エリコニンが「知的」とは考えなかった幼児の文学の理解は、絵本と幼児の実際の関わりに照らし合わせれば、「知的」であると佐々木は考えている。ここで佐々木は前項や前節のように明確に「人間的なるもの」という言葉を付してはいないものの、絵本の読み聞かせを「知的」なものとして強く主張するさまは、思考を可能にするという「人間的なるもの」の発達として絵本の「ひとり読み」への過程をとらえた結果と言えるだろう。

(3) 成立条件としての信頼関係・人間的交流

本節の最後に、ここまで述べた、「表象能力」の発達や外言から内言への思考の深化ほどソビエトの歴史社会的な発達観が色濃いとは言えないものの、絵本の読み聞かせと「人間的なるもの」の関連という点で参照すべき史料を以下示す。佐々木は、高度な認識行為である絵本の読み聞かせの成立条件に、そもそも大人と乳幼児の間の「基本的な信頼関係」「人間的交流」が必要であると述べる。換言すると、読み聞かせを通じて、絵の助けを借りながらの言語を通じた知的な意味理解という面で「人間的なるもの」が発達するだけでなく、その条件においてもすでに、大人と乳幼児の人間としての相互関係が求められるという。

佐々木によれば、テレビによる「〔虚構〕の刺激」は子どもから「生きた人間と直接交流するための基本的能力」を奪い交流の必要性も感じさせなくなるのに

対し、「人間をよく信頼している子ども」は、絵や人の声といった対象へ興味が集中する。それゆえに、大人と乳幼児の間には「基本的な信頼関係が確立されていなければならぬ」という⁴⁷⁾。

このような子どもについての、「絵本の内容を理解し楽しむ知的能力が育っているから「読める」ということだけではありません」という言及に注目しよう。佐々木によれば、「読める」理由は、対象に集中する態度をもち、「人間的交流が子どもにとっても楽しく意味のあることとして、すでに心のなかに定着している」からであるという⁴⁸⁾。したがって、「知的能力」とは異なる次元で「人間的」であることが意味づけられていると言える。これが、前項・前々項の内容と比べて歴史社会的な発達観が色濃いとは言い難いと先述した理由であり、佐々木は「人間的」であることを軸に独自の理論を生み出している面があると考えられる。「人間的」という言葉を用いて、佐々木は以下のように述べる。

絵本の中には、作家と画家が共同で創造した「人間的なるもの」が展開されています。そのような世界に生き生きと共鳴し、興味をもてるということは、その子どもが実際生活のなかでも遊びや親との交流を通して、生き生きとした人間関係をもっていることのあかしといえましょう⁴⁹⁾。

C 感性的認識・美的能力の発達研究の糸口

最後に本節では、1970年代の絵本をめぐる佐々木の記述において、前々節で述べたようにソビエトの心理学が明確に引用されているわけではなく、なおかつ前節のように読み聞かせの意義が論じられているわけでもないが、絵本が人間独自の美的・感性的能力の発達に関する研究の糸口として意味づけられている例を以下示す。

前述の通り、佐々木は絵という形象を借りながら乳幼児の言語的思考が深まる過程として、絵本を介した「人間的なるもの」の発達をとらえてきた。しかし、このような深まりだけでなく「絵本から絵へ」という「もうひとつの道すじ」として、感性や美の観点に立ち「人間的認識の発達」を明らかにする研究に、絵本が寄与する可能性にも言及している。佐々木は以下のように述べる。

このこと〔絵とコトバは完全に置換可能ではないこと〕は、人間の感覚や知覚もそれ独自の論理

をもって、単純なものから豊かなものへと発達することを示していると思います。感覚や知覚が、概念やコトバと比較して、より低次の心理過程であるなどとはいえないことになります。心理学は、今まで、ともするとこの“人間的感覚”“人間的知覚”のありようを分析することなく、“知覚”といえ、動物と比較しうる単純な過程のみと考えたり、また錯覚現象のあたりに気をとられていたように思います。

私は、感性的認識の段階にもっと人間的認識の発達をおしすすめる重要な力があると思いますし、それがまだあまり研究対象になっていないのではないかと思います⁵⁰⁾。

上掲から明らかなように、「感性的認識」の観点から「人間的」な感覚や知覚をとらえる必要を佐々木は示している。別の文献でも佐々木は、現状の「発達の研究」で「美的・芸術的能力はきわめて個人的イメージにもとづく個別的なものとみなされている」という問題を提示し、「子ども達のさまざまなニュアンスをもつ体験」の「既成の論理ではすくえない感性的イメージ」に焦点する重要性を主張する。そのような見落とされがちな人間の論理の再編成を明らかにするうえで必要となるのが、「絵本から絵（本）へのもうひとつのコース」に着目する「美的能力の発達」に関する研究であるという⁵¹⁾。

4 おわりに

本稿は、心理学者の佐々木宏子による1960-70年代の研究に焦点を当てた。佐々木は、幼児の思考に関する実験研究を中心に、心理学者としてのキャリアを大学院時代に始動させた。1970年代には、学生時代から学んだソビエトの心理学とその創造的な解釈を引き継ぎながら、絵本をめぐる発達心理学的な意味づけに議論の力点を大きく置き、一般向けの書籍や記事でも盛んに論じた。具体的には、歴史社会的な存在である人間の文化の継承、大人の読み聞かせするという行為を通じた言語による思考、そして言語によらない感性の発達という、いずれも「人間的なるもの」を支えるメディアとして、絵本をとらえた。

本稿は最後に、佐々木の1970年代までにおける一連の研究を同時代の文脈に位置づけることを試みる。これをもって本研究の意義と限界の議論とする。

第一に、本稿の内容と日本教育史の先行研究を踏ま

えると、戦後の日本がソビエトの心理学を受容した固有の受容ルートが新たに示唆される。ヴィゴツキー受容に限った議論からの推測になるが、以下がその理由である。岡花祈一郎は1960年代について、米国でヴィゴツキーはピアジェ批判の文脈で受容され、他方日本では発達理論よりも新教育批判の教育論のなかで受容されたと指摘しているが⁵²⁾、本稿の内容は米国のヴィゴツキー受容と類似している。本稿の内容は、前述の日本の主流のヴィゴツキー受容よりも、これに先駆けたヴィゴツキー受容であるという、東京保育問題研究会の乾孝による社会構成主義の学習理論「伝えあいの心理学」⁵³⁾に近いと推察される。なぜならば、頻繁ではないものの佐々木が「伝えあい」という語を使った例があるためである⁵⁴⁾。したがって、あくまでヴィゴツキー受容からの推察だが、ヴィゴツキーの主張も積極的に引用した佐々木は、岡花の指摘する日本におけるソビエトの心理学の主だった受容時期と、学んだ時期は1960年代で同じでも、その意味づけ方は新教育批判とは異なり発達に焦点化するという、固有のルートのもとにあったと予想される。そのルートのもとに、絵本をめぐる議論が位置づくようになった可能性を本稿は示す。なお、日本の1960年代とりわけ後半以降は、月刊保育絵本ではなく物語絵本を中心とした単行の絵本が保育で定着し始めた時期であり⁵⁵⁾、家庭でも類似の状況が想像される時期である。したがって、ソビエトの心理学を発達論として受容することの展開と、社会における絵本の広がりとの時期が重なっていたと考えられる。

第二に、このような佐々木の一連の記述を可能にしているのが、大学院で心理学の専門教育を受け、育児を通じて絵本に高い関心を示し、それを自身の新たな研究課題とする、この時期の女性の心理学者をめぐる文脈だろう。例えば、東京保育問題研究会文学部会に参加して読み聞かせの記録を取り幼児の認知と情動を研究した田代康子(1947-)も、1970年代に活動している⁵⁶⁾。こういった同時期の女性の心理学者が活動した文脈と佐々木の関係も、今後検討する必要がある。

最後に、本稿が検討した1970年代は、絵本の歴史研究では「赤ちゃん絵本」が隆盛した時期と言われている⁵⁷⁾。「子どもがはじめてであう絵本」シリーズで知られるブルーナの作品などは、本稿が引用した文献にもしばしば名が挙がっている。佐々木の1970年代の記述には乳児に関する記述が目立つ。こういった乳児をめぐる商品世界と発達心理学研究の関係も今後検討する必要がある。

【付記】

本稿の内容は、発達保育実践政策学センター(Cedep)×株式会社ポプラ社共同研究「子どもと絵本・本に関する研究」プロジェクトの成果である。また、その成果の一部は幼児教育史学会第18回大会にて発表した。

【謝辞】

論文執筆にあたってご助言を頂いた佐々木宏子氏に感謝申し上げます。

【註】

- 1) 永田桂子『絵本という文化財に内在する機能』風間書房、2013年。藤本朝巳「絵本研究」鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ：戦後絵本の歩みと展望』ミネルヴァ書房、2002年、353-366頁。
- 2) 浅野俊和「戦時下保育運動における「絵本」研究：「保育問題研究会」を中心に」『中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要』12号、2011年、29-40頁。
- 3) 宮本大人「戦時統制と絵本」鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ：15年戦争下の絵本』ミネルヴァ書房、2002年、23-25頁。
- 4) 若林陽子「物語絵本・漫画・児童雑誌をめぐる科学：阪本一郎による1950-1970年代の研究を手がかりに」『読書科学』64巻1号、2023年、15-28頁。
- 5) 永田前掲書、26頁。佐々木宏子「わが国における絵本の児童心理学的研究の成立過程について（Ⅲ）：戦後から現在まで」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』4号、1989年、65-85頁。
- 6) 村瀬孝雄「「ちびくろ・さんぼ」の魅力と子ども：心理学的考察」『文学』28巻1号、1960年、31-39頁。
- 7) 若林「物語絵本・漫画・児童雑誌をめぐる科学」前掲。
- 8) 永田前掲書、29-32頁。
- 9) 藤本前掲論文、363-364頁。
- 10) 例えば、佐々木宏子『絵本と想像性：三歳まえの子どもにとって絵本とは何か』(高文堂出版社、1975年)の、第2章第4節の科学絵本の例や第5章第1節の『こねこのねる』の例を参照。
- 11) 佐々木宏子『絵本と子どものこころ』有斐閣、1983年。佐々木宏子・宇都宮絵本図書館編著『幼児の心理発達と絵本』黎明書房、1984年。後者の本によると、宇都宮絵本図書館の設立は1978年9月である。
- 12) 本稿では、旧姓の櫛田名義で刊行された論文に対する説明でも、佐々木宏子の論文と呼ぶ。文献情報のみ当時のものに従って表記する。
- 13) 佐々木が長女を出産したのは1969年春である。佐々木「絵本と想像性」前掲書、3頁。
- 14) 櫛田宏子「J・ピアジェの思考心理学について：弁証法的唯物論の立場からの問題提起として」立命館研究所『立命館文学』281号、1968年、114-126頁。
- 15) 櫛田宏子「思考研究の方法論についての一考察：とくに幼児の概念形成の実験を中心として」『教育心理学研究』15巻1号、1967年、1-10頁。また、この論文を構成する内容について佐々木

- は、日本教育心理学会の第 7, 8 回大会 (1965, 1966 年) でも発表している。本註を含め以後全て、紙幅の関係で大会要旨の文献情報一覧を省略。
- 16) 厳密に言えば、同論文における批判対象はピアジェの心理学だけでなく、米国の新行動主義の心理学にも及んでいることを注記しておく。櫛田「思考研究の方法論についての一考察」前掲, 1 頁。
- 17) 櫛田「思考研究の方法論についての一考察」前掲, 1 頁。
- 18) 同上, 1-6 頁。
- 19) 同上, 7, 9 頁。
- 20) 佐々木宏子「思考の発達」佐々木保行他著『児童発達心理学：新しい日本の子どもたちのために』高文堂出版社, 1973 年, 88 頁。この論文を含む本は 1970 年に入ってから刊行されているが、この論文は、佐々木が 1960 年代末に行った実験研究の成果を転載元の許可のもと掲載したものが本体となっているため、1960 年代の研究に関する本章の史料に含めている。
- 21) 佐々木宏子「幼児の論理的思考についての実験的一考察」『教育心理学研究』18 巻 4 号, 1970 年, 1-11 頁。この論文は 1970 年に入ってから刊行されているが、実験が行われた時期は、論文の記述によれば 1968 年 6-7 月であるという。また、本研究の予備実験について、同論文に記載の通り日本教育心理学会第 9 回大会 (1967 年) ですでにその成果が発表されているが、この大会要旨によれば予備実験が行われたのは 1967 年 3-5 月である。このため、佐々木による 1960 年代後半の研究にこの論文を含める。
- 22) 佐々木「幼児の論理的思考についての実験的一考察」前掲, 1-2 頁。
- 23) 発達の輻輳説などで知られるドイツの心理学者シュテルン (1871-1938) が幼児期の思考の特性を説明した概念「転導推理」のこと。
- 24) 佐々木「幼児の論理的思考についての実験的一考察」前掲, 1 頁。
- 25) 同上, 2 頁。
- 26) 予備実験については学会発表要旨にしか記述しかないので以下の文献を参照した。佐々木保行・櫛田宏子「子どもの論理的思考の発達：その方法について(2)」日本教育心理学会『第 9 回総会発表論文集』1967 年, 100 頁。
- 27) 最も古いものは管見の限りでは、日本教育心理学会第 12 回 (1970 年) 大会での発表「子どもの論理的思考の発達：おはなしづくりについて(1)」である。発表要旨によるとこれは予備実験であり、1970 年 6 月に行ったという。このように一連の「おはなしづくり」の研究は、準備も含めて 1970 年代に入ってからなされた可能性が高いが、この研究は佐々木「思考の発達」前掲論文にまとめられていることから、絵本を用いた実験として 1960 年代から着手された研究とのつながりが深いと考えられる。この理由から本章の史料に含める。
- 28) 佐々木「思考の発達」前掲, 84-114 頁。この研究は、日本教育心理学会大会第 12 回 (1970 年) から第 17 回 (1975 年) までの第 15 回を除く毎年にも発表されている。
- 29) 佐々木「思考の発達」前掲, 87-88 頁。
- 30) 佐々木宏子「連想とその年齢のひろがり」『言語生活』280 号, 1975 年, 44-51 頁。
- 31) 1970 年代における学術色の強い成果発表として、前掲の「思考の発達」や松本金寿他著『教育心理学』(新読書社, 1974 年) 所収の佐々木の論文といった心理学の理論的文献のほか、日本教育心理学会での定期的な発表もあることを注記する。
- 32) 単著の出版も重なって絵本をめぐる議論は 1970 年代の著述の基調となっていると言えるが、この時期には同時に、乳児保育や、共働き家庭の育児、育児労働問題としての「子殺し」といった主題にも議論が新しく広がり始めていることを注記する。
- 33) 佐々木宏子「絵本の心理学 人間発達の新しい見方」『教育心理』24 巻 5 号, 1976 年, 60 頁。
- 34) なお、類似の記述が、『絵本と想像性』前掲書第 6 章における、微視的な実験研究の紹介からもうかがえる。これはたしかにソビエトの心理学者や心理学の概念が明らかに引用された箇所だが、以下の理由により本文では引用しない。佐々木は、「子どもが絵を見る場合の基本的な特徴」をおさえるため、絵の読みとりを一旦あえて図形の輪郭の読みとりの問題に還元させる。ここで、ザポロージェツの編著書『知覚と行為』(青木冨子訳, 新読書社, 1973 年) 所収の、ヴェンゲルらによる図形の「知覚の行為」「再認行為」に関する幼児の実験研究が示される。ただし、この引用は佐々木の記述のなかで、「人間的なるもの」と呼ばれるものの発達を支えるという、絵本への意味づけとは直結していない。
- 35) 佐々木宏子「子どもが絵本から得るもの」中村悦子・佐々木宏子編著『集団保育と絵本』高文堂出版社, 1976 年, 41-42 頁。
- 36) 『集団保育と絵本』以外には以下の文献にも類似の言及がある。佐々木「絵本の心理学 人間発達の新しい見方」前掲, 60-63 頁。
- 37) 佐々木「子どもが絵本から得るもの」前掲, 43 頁。
- 38) 佐々木宏子「子どもの心理発達と絵本：特に乳幼児を中心に」中村・佐々木前掲編著書, 118-120 頁。
- 39) 佐々木宏子「子どもにとって絵本とは何か」『日本児童文学』23 巻 13 号, 1977 年, 237-238, 240 頁。
- 40) 佐々木「絵本の心理学 人間発達の新しい見方」前掲, 61 頁。ほぼ同様の内容は以下の文献にも含まれる。佐々木宏子「子どもの発達と幼児・幼年童話」『日本児童文学』22 巻 2 号, 1976 年, 49-50 頁。
- 41) 佐々木「絵本の心理学 人間発達の新しい見方」前掲, 61-62 頁。「表象 (の) 能力」という語が用いられ、同様の内容を含む以下の文献もある。佐々木「子どもにとって絵本とは何か」前掲, 239 頁。佐々木宏子「絵本の与え方」同文書院『総合乳幼児研究』1 巻 2 号, 1977 年, 47-50 頁。佐々木宏子「心の発達と絵本・幼年童話におけるたべもの」『日本児童文学』24 巻 11 号, 1978 年, 44-45 頁。
- 42) 佐々木「絵本の心理学 人間発達の新しい見方」前掲, 62 頁。
- 43) 佐々木「子どもの発達と幼児・幼年童話」前掲, 48 頁。佐々木「絵本の与え方」前掲, 47 頁。
- 44) 佐々木「子どもにとって絵本とは何か」前掲, 240-241 頁。
- 45) 佐々木「子どもが絵本から得るもの」前掲, 45 頁。
- 46) 佐々木「子どもの発達と幼児・幼年童話」前掲, 52-53 頁。
- 47) 佐々木「子どもにとって絵本とは何か」前掲, 237-238 頁。
- 48) 同上, 238 頁。以下の文献にも類似の言及がある。佐々木「絵本の与え方」前掲, 48 頁。
- 49) 佐々木「子どもにとって絵本とは何か」前掲, 238 頁。以下の文献にも類似の言及がある。佐々木「絵本と想像性」前掲書, 120-122 頁。
- 50) 佐々木「絵本の心理学 人間発達の新しい見方」前掲, 63 頁。
- 51) 佐々木「子どもにとって絵本とは何か」前掲, 241 頁。以下の

- 文献にも類似の言及がある。佐々木宏子「絵本：児童心理学からの研究視点をさぐる」日本児童研究所編『児童心理学の進歩』金子書房、19巻、1980年、310-330頁。
- 52) 岡花祈一郎「日本と米国におけるヴィゴツキーの受容に関する比較検討」『日本教育学会大会研究発表要項』69巻、2010年、302-303頁。
- 53) 浅井幸子「東京保育問題研究会における「伝えあいの保育」の成立：乾孝の「伝えあいの心理学」との関係に着目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』57巻、2017年、241-259頁。
- 54) 佐々木「子どもの心理発達と絵本」前掲、118頁。
- 55) 若林陽子「1960年代の保育の言語活動における物語絵本の広がり」と定位：素話・紙芝居との比較を通じた検討」『読書科学』60巻2号、2018年、89-100頁。
- 56) 田代康子「「科学性と実践性」をめぐる議論を背負って見えた課題：「心理状態」という心理学固有のアспектと関連して」『心理科学』31巻1号、2010年、11-22頁。
- 57) 中川あゆみ「1970年代の絵本：「絵本ブーム」と呼ばれた時代」鳥越編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ』前掲書、165-181頁。

(指導教員 浅井幸子教授)